

「シャルリー・エブド」は14日に発売した特別号にも、預言者ムハンマドの風刺画を載せました。日本のテレビ局はムスリム（イスラム教徒）に見せて感想を聞いていたが、見せることによる暴力性を考えていない。あの絵は侮蔑的なものではなかったが、それは非ムスリムの解釈で、預言者を嘲笑してきた同紙が何を描いても、ムスリムの嫌悪は消えません。

フランスでも人種や民族への侮辱は表現の自由として認められないが、宗教は冒涇（ぼうとく）を許される。厳格な世俗主義を国是とし、公共や言論の場は非宗教的だから、神や預言者を風刺するのは権利だと考える。しかしムスリムにとって、ムハンマドは自分の心身と一体化している存在。預言者を嘲笑されることは、自分を否定されるように感じる。彼らがヘイトだと受け取っている以上、差別なんです。心底見たくないものを見てから議論しろというなら、暴力です。

フランスは第2次世界大戦後、旧植民地から大量の移民を受け入れました。移民1世は生活に必死で信仰実践に熱意はなかった。しかしフランス国籍をもつ2世、3世のイスラムへの回帰が目立つようになると、フランス社会はひどくいらだった。フランス的な自由から逃避して、信仰に邁進（まいしん）することが理解できないからです。

だが若者にしてみれば、多くが社会的・経済的に底辺に滞留し、「自由・平等・博愛」など実感できない。彼らは移民のイスラム共同体で初めて自由や平等を知り、愛されていると実感したんです。

怒りを胸に秘め

イスラムに聖俗分離の概念はなく、信仰実践を個人の領分にとどめない。女性はスカーフやベールをかぶって公の空間に出る。スカーフはイスラムの教えに従うもので、頭髪などに羞恥（しゅうち）心を感じる人はかぶる。だがフランスは、これをイスラムのこれ見よがしなシンボルとして排除しました。フランスの原則に異を唱えようと、即座に激しい批判に直面することを移民は思い知らされました。

外に目を向ければ、中東の情勢がきわめて悪化している。フランスに居場所がないのなら、イスラム国などの戦闘的ジハード（本来は「信仰を正す努力」）の呼びかけに応じようとする若者が出てくる。だが、それはフランスのムスリム500万人のごく一部です。大多数のムスリムは、信仰を否定される怒りを胸に秘めたまま、フランスで生きています。

2001年の米同時多発テロ以降、欧州では反イスラム感情が高揚した。だがイスラム排斥の論理は国によって違う。フランスは同化圧力が強く、国民戦線のような極右に限らず、共和国の原理に従わないなら出ていけという。オランダは多文化主義で同化を求めない。排外主義者はむしろリベラルを自任していて、イスラムは抑圧的な宗教だから排除しろという。

とはいえ、今回の事件をきっかけに「表現の自由を守れ」「反テロ」という論理で一色になる可能性は高い。テロとの戦いとして中東で軍事力を行使すれば、テロリスト以外のムスリムの命も奪う。すでにシリア、リビア、ガザ地区で多くの市民の犠牲が出ている。

中東は崩壊の危機にあり、ムスリムの殺戮（さつりく）に欧米諸国は加担しています。シャルリー・エブドの犠牲者を追悼する大行進に、ムスリムに犠牲を強いる国の指導者が参加したことは、オランダ政権の失策でした。テロを根絶するには、中東の安定化が不可欠。欧州のムスリム移民は、自分たちの国での生きづらさから、怒りの矛先を中東にも西欧にも向けています。

共存の道を探れ

西欧とイスラムは、パラダイム（構成原理の体系）が違う。西欧、特にフランスでは神から離れることで自由を得た。イスラムでは、神と共にあることで自由になれると考える。神の法が認める範囲では欲望を満ちし、人生を楽しむことが許されるからです。

パラダイムが異なる両者は「共約（きょうやく）不可能」な関係にあり、一方の原理を押しつけても他方には通じない。暴力の応酬を断つなら、**パラダイムの違いを認識した上で、一から共存への道を探っていくしかない。**啓蒙（けいもう）が西欧の普遍的な価値だとしても、圧力でイスラムが変わることは決してありません。

(聞き手・尾沢智史)

ないとうまさのり

56年生まれ。一橋大学教授を経て現職。専門は多文化共生論、現代イスラム地域研究。著書に「イスラム戦争」「イスラムの怒り」など。